

# 認識論のレビューに関する一考察（2）

——人材開発の手法の理解に役立てるために——

加 藤 雄 士

## 要 旨

本稿では、前稿に続いて認識論を学際的にレビューしている。最初に、前稿で紹介した4つのモデルの図を再掲して、類似点と相違点を考察した。このうち「データ→認識→情報」というプロセスで説明できる薄井と地橋のモデルをベースに、養老孟司、釈迦の仏教、般若心経、一般意味論の認識論の考察を進めた。認識に関する複数の理論を学際的にレビューしておくことで、認識論の理解が進むだけでなく、それぞれの理論の理解にも役立つという示唆が得られた。

## I はじめに

筆者は専門職大学院における人材開発論の講義や企業研修などを通じて、効果的な人材開発手法に関心をもってきた。その効果的な手法を選択するためには、人がどのように経験を認識するのか、そのメカニズムを深く理解し、説明できるようにしておく必要がある。そこで、前稿に続き認識論を学際的にレビューしていく。具体的には前稿で考察した薄井と地橋のモデルをベースにして、養老孟司、仏教（釈迦の仏教、般若心経）、一般意味論を比較考察し、認識論の理解を深めていく。

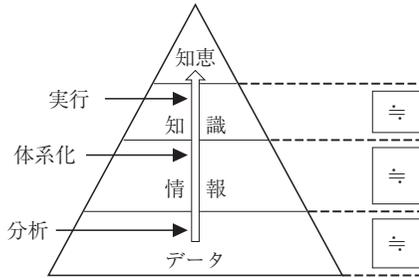
## II 認識論のレビュー(1)

本章では、前稿で考察した認識論のうち4つのモデルについて、類似点、相違点を考察していく。

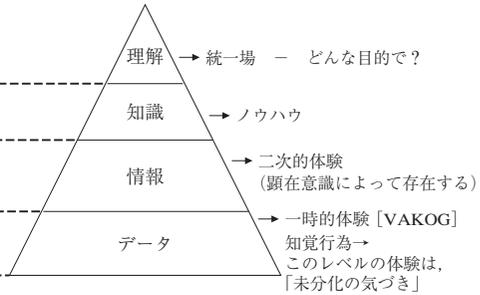
### 1 前稿で考察したモデル

前稿では、ナレッジ・マネジメント（梅本のモデル）における認識論、グレゴリー・ベイトソンの認識論、クリスティーナ・ホールの認識論、看護学（薄井担子のモデルなど）における認識論、ヴィパッサナー瞑想（地橋秀雄のモデル）における認識論などを考察してきた。本研究を進めるにあたり、まず、前稿で考察した認識論のうち4つのモデル（筆

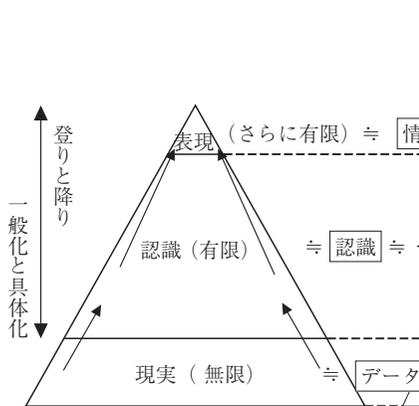
図表1 梅本のモデル<sup>1)</sup>



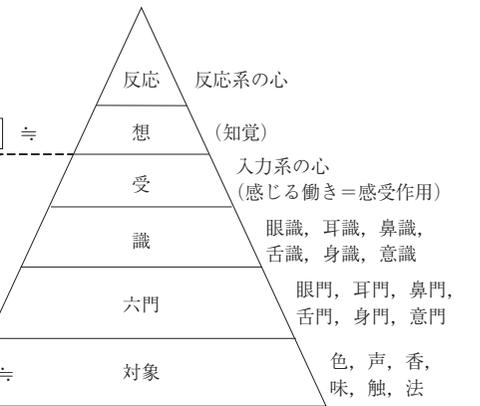
図表2 クリスティーナ・ホールのモデル<sup>2)</sup>



図表3 薄井のモデル<sup>3)</sup>



図表4 地橋のモデル<sup>4)</sup>



者が一部加筆した図)を再掲することによりそれらの類似点と相違点を考察する。

## 2 4つのモデルの類似点と相違点

これら4つのモデルを比較し、類似点を考察する。梅本とクリスティーナ・ホールのモデルの下層部分の「データ→情報」というプロセスは同じ(概念としては)である。また、薄井のモデルの「現実」を「データ」と、「表現」を「情報」ととらえ、地橋のモデルの「対象」を「データ」と、「想」を「情報」ととらえると、梅本とクリスティーナ・ホールのモデルの下層部分と薄井、地橋のモデルは類似している。薄井のモデルでは、データと情報の間に「認識」のプロセスが明示されており、地橋のモデルでは、データと情報の間の認識のプロセスがさらに詳細に説明されていると考えることができる。人材開発という観点からは、「データ」と「情報」の違い、「データ」が「情報」に変換される過程(すなわち認識の過程)、「情報」が「知識」に変換される過程などの理解が重要となる。本稿では、薄井と地橋のモデルをベースにして認識論の考察を進めていく。

### III 認識論のレビュー(2)

本章では引き続き学際的に認識論のレビューをしていく。引用文の中で筆者（加藤）が重要と考える箇所の下線を引く。

#### 1 養老孟司『バカの壁』と認識論

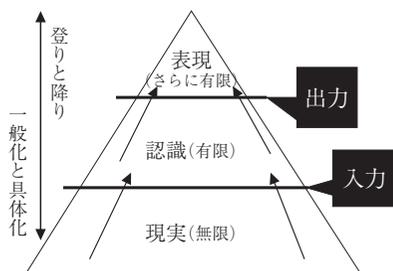
薄井のモデルをベースに認識論の理解を深めるために、養老孟司『バカの壁』を引用していく。養老の概念を薄井のモデルにあてはめ筆者（加藤）が加筆した図を紹介していく。

##### (1) 現実から認識に至る「壁」（バカの壁）<sup>5)</sup>

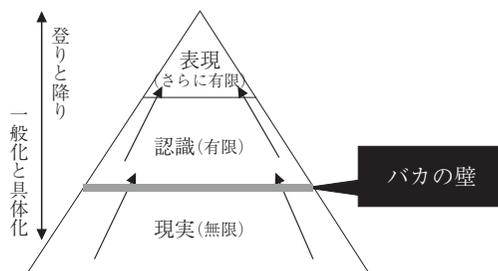
養老（2003）は、認識に関して、入力、出力のモデルで説明し、「入力」は情報が脳に入ってくること、「出力」はその情報に対する反応と説明している。入力は五感（で行われ）、出力は（最終的に意識的な出力、具体的には）「運動」のことをいう。ここで運動とは、話すこと、書くこと、手招きや表情などのことをいう。入力された情報について頭の中で考えを巡らせることも入出力のひとつであり、出力は脳内の運動になっている。五感から入力して運動系から出力する間、脳は入力された情報を脳の中で回して動かしている。

われわれは、自分たちの脳にはいることしか理解できない。自分が知りたくないことについては自主的に情報を遮断する。ここに壁が存在する。また、「自分たちは知っている」と思ってしまうことでも情報が遮断される。一種の「バカの壁」である。これを、薄井の図にあてはめると、現実と認識の間に「入力」があり、ここにバカの壁が存在すると考えることができる。また、認識と表現の間に「出力」があると考えることができる。

図表5 薄井のモデルと養老の認識論



図表6 薄井のモデルと「バカの壁」



##### (2) 脳内の一次方程式（入力と出力の関係）<sup>6)</sup>

養老は、脳内の働きを、「 $y=ax$ 」という一次方程式のモデルで説明している。

$$y=ax$$

$y$ =反応,  $a$ =現実の重み,  $x$ =入力情報

何らかの入力情報  $x$  に、脳の中で  $a$  という係数をかけて出てきた結果、反応が  $y$  になる。 $a$  という係数を、「現実の重み」と呼び、 $a=ゼロ$  の場合は、入力に何を入れても出力はなく行動に影響しない。行動に影響しないということは、その人にとって現実ではない。「親父の説教」を聞き流すようなものである。その ( $a=ゼロ$ ) の逆は、 $a=無限大$  になる。代表例が「原理主義」である。また、 $a>ゼロ$  の場合を「好き」、 $a<ゼロ$  の場合を「嫌い」と考える。一般に、人を非難するときは、マイナスの思いがあるということになる。本気で非難しているということは、少なくともその対象を現実だと思っているということになる。オセロゲームみたいなものだから、マイナスがたまっているのが、急にぱつとプラスに転化することもある。

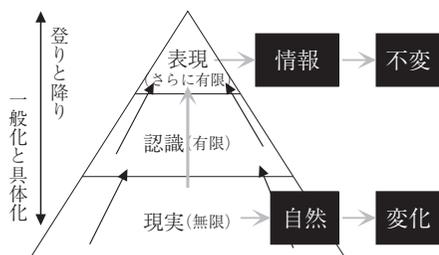
### (3) 脳内の自給自足<sup>7)</sup>

人間の処理装置は巨大になっており、その結果、外部からの入力で単純に出力する、というだけでなく、外部からの入力かわりに、脳の中で入出力を回すことができるようになってきた。入力を自給自足して、脳内でグルグル回しをする。よく言えば思索と言えるけれども、このグルグル回しばかりしている人は、一生懸命考えてはいるけれども、何も生み出さない人間ということになる。

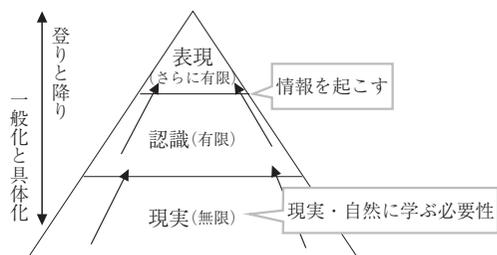
### (4) 情報と生き物のあべこべ現象<sup>8)</sup>

養老は、「永遠に残ってしまう言葉」を「情報」と呼び、情報は絶対変わらないという。逆に、生き物（人間）は、どんどん変化していくシステムである。常に変化＝流転していて生老病死を抱えているのに、己を情報だと規定する（バカな思い込みをする）のが近代的個人である。繰り返すと、人間も人生も万物流転なのに対して、情報は不変である。

図表7 薄井のモデルと「情報」、「自然」



図表8 薄井のモデルと「意識化」

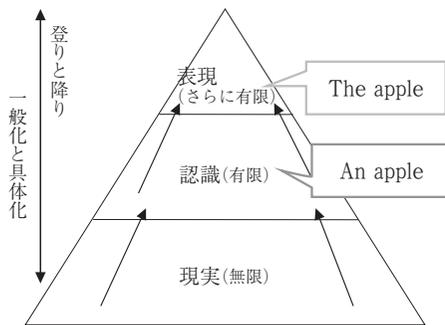


最近の学生は、いったん情報化されたものを上手に処理するのは大変うまいが、情報ではなく、自然を学ばなければならない。人間そのものが自然だという考えが前提にあるからだ。また、現物から学んだり、現物から情報を起こしてくる必要がある。そのためには、外へ行って、体を使って働けということだ。

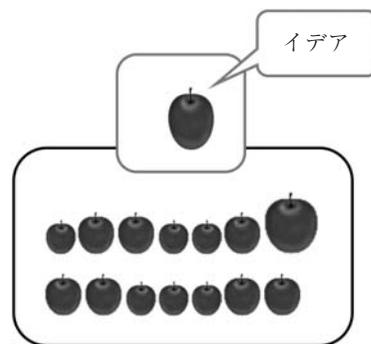
(5) 認識活動とプラトンの「アイデア」<sup>9)</sup>

机の上に何かあって、それが視覚情報として脳に入ってきた時に、脳味噌で言語活動が起こる。この時点では、あくまでも、視覚情報として入ってきた「赤くて丸い物」に対して脳の中で「認識活動」が発生した結果としての「リンゴ」（不定冠詞が付く「An apple」）に過ぎない。この時は脳内の過程に過ぎない。外界のリンゴを本当に手で掴んで齧ってみた時点でようやく実体としての「リンゴ」（実体となったから定冠詞が付く「The apple」）になる。

図表9 2つの apple



図表10 アイデア<sup>10)</sup>



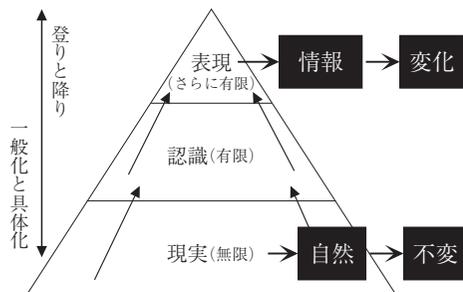
なお、1つ1つのリンゴを総称した「リンゴ」という言葉（すべてのリンゴの性質を備えた）を、プラトンでいう（リンゴの）「アイデア」と呼ぶ。人間が頭の中だけで生み出すものを昔は「概念」と言い、プラトンの「アイデア」と言ってもよい。基本的にそういうものは、外部との関係があるとはいえ、頭の中の産物である。

(6) 忘れられた無意識・身体・共同体<sup>11)</sup>

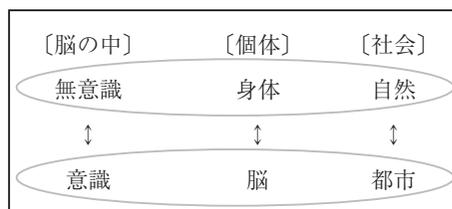
養老は、「情報」と「生き物」（自然）とにあべこべ現象が起きているが、それは「無意識」（と「意識」）、「身体」（と「脳」）、「共同体」（「自然」と「都市」）の問題も同様だという。

人間は往々にして入力ばかり意識して出力を忘れやすく、身体を忘れている。基本的に都市に住んでいるということは、すなわち意識の世界に住んでいるということである。そ

図表11 あべこべ現象（間違った認識）



図表12 無意識・身体・自然



して、意識の世界に完全に浸りきってしまうことによって無意識を忘れてしまう、という問題が生じてきた。脳化社会である都市から、無意識＝自然が除外されたのと同様に、その都市で暮らす人間の頭からも無意識がどんどん除外されていっている。あくまでも自分には無意識の部分もあるのだから、という姿勢で意識に留保を付けることが大切である。

#### (7) 考察

ここまで、養老の説明を薄井のモデル（図）にあてはめながら考察してきた。養老（2003）は、認識に関して、入力、出力のモデルで説明し、「入力」は情報が脳に入ってくること、「出力」はその情報に対する反応と説明している。薄井のモデルにあてはめると、「現実」と「認識」との間に養老の言う「入力」があり（そこに「バカの壁」が存在する）、「認識」と「表現」の間に「出力」があると考えられる（図表5、6参照）。また、養老は脳内のモデルを「 $y=ax$ 」の一次方程式で説明しており、入力された情報を  $x$  とすると、 $x$  に「現実の重み（ $a$ ）」を乗じたものが反応（ $y$ ）になるという。前述の「バカの壁」、 「現実の重み」（の段階）で、クリスティーナ・ホールが言う削除、歪曲、一般化が行われているものと考えられることができる。つまり、入力段階で、情報の一部だけが取り込まれ（つまり削除が行われ、同時に、歪曲、一般化も行われる）、また、現実の重み（ $a$ ）についても、人により異なる削除、歪曲、一般化が行われているものと考えられる。こうした知識からは、同一の現実を前にして、人が同じ認識をすることは不可能だと理解できる。

また、「情報」が不変であり、「現実（自然）」は変化するが、現代人はあべこべにとらえていると養老は強調している。人間は自然の一部であるため、常に変化しているのだという説明も、人材開発の目的の一つを変化だと仮定したときに有用となる。なお、養老は、自分の書いてきたことは仏教思想と同じだと説明する<sup>12)</sup>。以下ではその仏教思想（「釈迦の仏教」と「般若心経」）における認識論を考察していくことにする。

## 2 「釈迦の仏教」と認識論

前稿では地橋の仏教のモデルを考察したが、今回は佐々木（2012）および佐々木（2014）から引用し、「釈迦の仏教」における認識論を別の視点から考察する。

### (1) 釈迦の仏教の特徴<sup>13)</sup>

釈迦は苦しみの原因は、私たちの心であり、私たちの心が作り出す様々な悪心、悪行がエネルギー源になると説く。そのため、この世の苦しみを消すには、自分の心の在り方、ものの見方を変えるしかないと主張する。つまり、受け入れる側の自分の在り方を変えるしかない。このように苦しみの原因を、外的な物理現象ではなく、自分の在り方へもっていくところに仏教の特徴がある。

### (2) 八正道の「正見」と「正定」<sup>14)</sup>

釈迦は苦が生じるプロセスと苦をなくす解決方法の4つの真理を「四諦」と呼んだ。四諦の4つ目に「道諦」（煩惱をなくし、悟りを得るための8つの道）があり、「八正道」と呼ぶ。八正道の1つ目が「正見」である。これは、「正しいものの見方をするということ」である。ヴィパッサナー瞑想（マインドフルネス瞑想）でサティを入れるのもこの正見が目的といえる。また、八正道の8つ目は「正定」であり、正見にもとづいた正しい瞑想をするということである。「正しい」という意味は、自分中心の誤った見解を捨て、この世の有り様を客観的に合理的に見るという意味を含む。

### (3) 「無明」と「明」<sup>15)</sup>

釈迦は、煩惱の中でもいちばんおおもととなる煩惱を「無明」だという。無明とは、「智慧（明）」が「無い」ことである。智慧がないとは「この世で起こっているものごとを正しくとらえる力がない」ということ、あるいは、「この世で起こっているものごとを自分の都合でねじ曲げてとらえている」ということである。逆に言うと、現実をありのままに正しく認識できるならば、それは「明」となる。

この世で起こっているものごとの正しい姿とは、「すべてうつろう」ということ、「すべてのものは時々刻々と変化するのであり、永遠不滅なものなど、どこにもない」つまり「諸行無常」ということである。現実をありのままに受け入れ、その世界に耐えるべく、自分の価値観・世界観を変えていく必要がある。

### (4) 釈迦の世界観（認識と「分類」）<sup>16)</sup>

「分類」とは、すなわち、世界をどう見るか、というその人その人の世界観の表現であ

り、同じものでも、異なる世界観の人が分類すれば、異なる分類が生まれる。そして、釈迦に始まる仏教の分類方法は、科学とは全く違う基準に基づいている。それは、「人はこの世をどう認識しているか」という基準に基づく分類である。

「釈迦の仏教」がどのように世界を認識していたかについては、以下の五蘊、十二処、十八界の図（佐々木（2014）の図<sup>17)</sup>を筆者が加筆修正した）を参照されたい。

図表13 五蘊（色、受、想、行、識）

肉体	① 【色】 われわれをなしているものの外側の要素すべて	ひとりの人間
心的作用	② 【受】 外界からの刺激を感じ取る感受の働き	
	③ 【想】 ものごとを様々に組み立てて考える構想作用	
	④ 【行】 何かをしたいと考える意思の働きや、その他の心的作用	
	⑤ 【識】 心のあらゆる作用のベースとなる認識する働き	

図表14 十二処（六根と六境）と十八界（十二処に六識を加えたもの）

〔認識する側〕 (感覚器官)	〔認識される側〕 (その対象)	〔五 蘊〕	〔生じてくる認識〕
① 【眼】 げん	⇔ 【色】 しき	五蘊における 「色」	⇒ 【眼識】 V
② 【耳】 に	⇔ 【声】 しょう		⇒ 【耳識】 A
③ 【鼻】 び	⇔ 【香】 こう		⇒ 【鼻識】 O
④ 【舌】 ぜつ	⇔ 【味】 み		⇒ 【舌識】 G
⑤ 【身】 しん 五 根	⇔ 【触】 そく 五 境		⇒ 【身識】 K
⑥ 【意】 い 六 根	⇔ 【法】 ほう 六 境	五蘊における 「受」「想」 「行」「識」	⇒ 【意識】 六 識

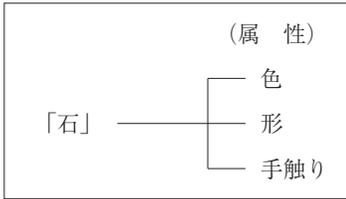
#### (5) 釈迦の世界観の具体例<sup>18)</sup>

釈迦の世界観は具体的に次のように説明されている。

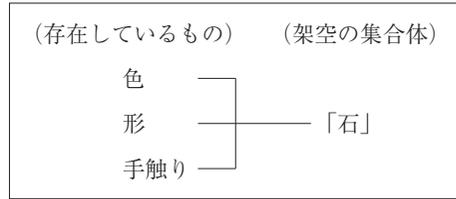
多くの人は、自分が手に持っているものは「石」という絶対的に確固たる物体であり、色や形や手触りなどは、その石に付随している「属性」にすぎないとする。つまり、「石にいろやかたちや固さがある」と考える（図表15参照）。

しかし、釈迦はそうは考えない。反対に、絶対的に存在しているのは目や手がとらえた

図表15 「石」と属性のとらえ方



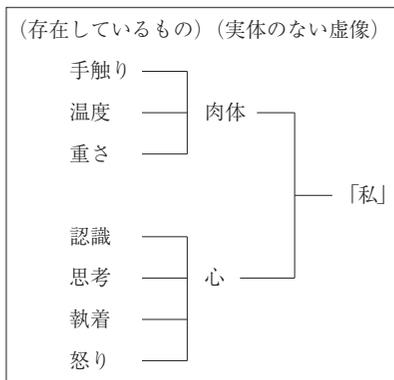
図表16 存在するものと架空の集合体



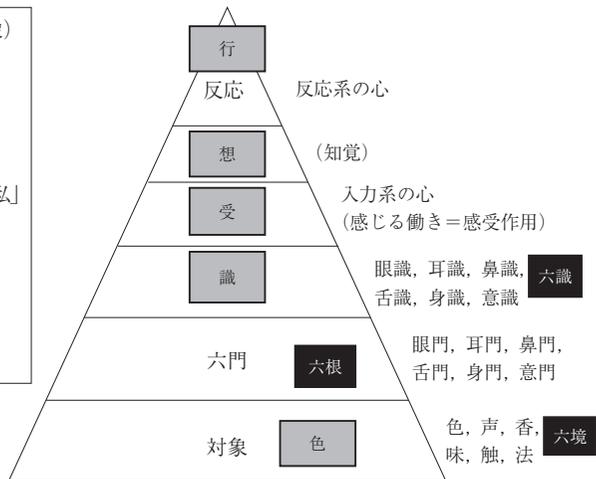
「いろ」や「かたち」や「手触り」の方であり、「石」というのは、それらを心の中で組み上げた架空の集合体にすぎないと考える（図表16参照）。

では、「石」ではなく、「私」だったらどうかというと、「私」もまた「石」と同じである。いろやかたち、手触りや温度、重さなど、様々な基本要素を集積してきている「仮の姿」である。人の場合は、「肉体」だけでなく、そこに「心」というものも加えなければならない。「認識」とか「思考」とか「記憶」とか「執着」とか「怒り」とか「感性」とか、様々な心的作用も、その集合全体の要素になっている。集積され、絡まりあっている「何ものか」である。無数の要素の集まりが、時間の経過に沿って絶えず変化する複雑系、それが「私」である（図表17参照）。

図表17 実体のない虚像



図表18 地橋のモデルと「実在するもの」<sup>19)</sup>



この「石」や「私」の例からわかるとおり、この世に実在するのは「眼」「耳」などの認識器官、「色」「声」などの個別の認識対象、そして、「心」や「心の作用」といった内側の諸要素だけ（図表18参照）なのであり、我々が普段、そこに実在すると思っている様々な対象物は、それらを寄せ集めた架空の存在、実体のない虚像である。つまり、釈迦は

(大乘仏教も)、「石」や「私」などは、私たちが「ある」と思いこんでいるだけのまぼろしだと考えた。

#### (6) 世界を正しく見るための羅針盤 (諸行無常と諸法無我)<sup>20)</sup>

子どもや財産だけでなく、実は「私」というものも、自分の所有物ではない。だから「こうしよう」「ああしよう」と思っても、そのように自分を動かしていくことができない。頭の中でいくら理想の「自分像」を作ってみても、現実の自分はどんどんそこから逸れていってしまう。この世に、「これだけは私のものだ。これだけは、私の思いどおりになるのだ」という、そんなものはどこにもないということになる。

では、執着はどこからうまれるのかというと、自分の利益のため、自分の功名のため、自分の楽しさのため、自分の幸せのため……と、なにごとにも自分を中心に置き、自分に都合のよい方向でものを考えるところからである。ブッダは、そもそも自分などないのであり、ありもしない自分を中心に世界をとらえるのは愚かさのきわみだと説いた。このように執着とは「自分中心」の世界観から発生し、自分中心の考え方に立つ限り、欲望は消えないし、きりが無い。

ここでその中心人物たる自分を、「それは実在しない仮想の存在である」として、その絶対存在性を否定してしまうと、まわりにある所有世界も自然に消える。自分というものが本質のない仮想世界なのだから、当然、それを取り巻く世界も仮想だということになり、執着もおおずと消える。これを表す言葉が「諸法無我」と言う。

「この世のすべてのものはうつろう」という意味の「諸行無常」に対して、「諸法無我」は、「この世に『私』という絶対的存在などどこにもない」という意味である。この2つが世界を正しく見るための羅針盤となる。

#### (7) 考察

釈迦の仏教では、苦しみを消すにはものの見方を変えるしかないと主張する。裏返すと、ものの見方で人は苦しんでいるということになり、ものの見方(認識論)が重要だという示唆が得られる。そして、現実をありのままに正しく認識するために瞑想があるとする。

釈迦は、ものの見方(認識の仕方)に基づく「分類」を論理的に示し、世界に実在するものは五蘊、十二処、十八界の3つしかないという。肉体も心も私さえも実体はない存在だとする。なお、「五蘊」とは、「われわれ人間はどのようなものからできていて、どのようなありかたをしているのか」ということを釈迦が分析し、五つの要素に分けて把握したものであり<sup>21)</sup>、外界の要素すべてである「色」、刺激を受け感受する「受」、組み立てて構想する「想」、考える意思の働きである「行」、認識する働きの「識」からなる(図表13参

照)。「十二処」は、五感の器官に意を加えた「六根」、その対象である「六境」とからなり、「十八界」は、それらに「六識」(「意」が作用し、その結果生じてくる認識)を加えたものである(図表14参照)。釈迦の仏教は、実在しているもの(データ)は何か(図表18参照)、人間が作り上げたもの(情報)は何かを説明しており、「データ」と「情報」や認識論の理解にも有用である。養老は、「私」は常に変化し続けるものであり、変わらない「私」などないと説明したが、釈迦の説明では、「私」とは「無数の要素の集まりが時間の経過に沿って絶えず変化する複雑系」であり、「本質のない仮想世界」だと説明する。

### 3 般若心経(大乘仏教)と認識論

続いて大乘仏教の中で生まれた「般若心経」の經典に関して、佐々木(2014)から引用して考察する。

#### (1) 釈迦の仏教を超越する論理<sup>22)</sup>

般若心経は、釈迦の時代の教えを「錯覚である」と言って否定し、それを超越するようなもう1つ高次の論理をその上にかぶせ、みずからが釈迦の時代の教えよりも上位に立つことを目指した經典である。釈迦が、この世を形成している一番おおもとの存在要素(法)だと言ったものには、そもそも実体がない。実体がないのだから、それが生まれたり消えたり、汚れたりきれいになったり、増えたり減ったりしている(ようにみえる)のも、すべて錯覚だと言う。釈迦が説いたこの世のあり方を無化する言葉である。

釈迦はこの世の本質を「諸行無常」、つまり、「すべてのものはうつりゆく」と見抜いたのだが、般若心経では、その「諸行無常」の原則さえも否定している。あらゆる存在要素が、生まれたり消えたり、増えたり減ったりして転変しているようにみえる、その見え方さえも錯覚だという。

般若心経も釈迦と同じく、「石」や「私」などは、私たちが「ある」と思い込んでいるだけのまぼろしだと考えた。そこまでは一緒である。しかし、般若心経では、それらを構成している「五蘊」「十二処」「十八界」のような基本要素までも「実在しない」ものと言った。そして、すべてが実在しないのだから、要素と要素の間を結んでいる因果関係のようなものも存在しないことになる。釈迦が説いたこの世の法則性もすべて架空のものとなってしまう。

#### (2) 釈迦の仏教と般若心経との違い<sup>23)</sup>

般若心経では、「お釈迦様のおっしゃったことは立派だけれども、お釈迦様のように深い知性で世界を見、論理でものごとを突き詰めることは難しい。人間は情緒で世界を見、

感情でものごとに納得することだってあるのだ」と考えたのかもしれない。

「釈迦の仏教」は、心の苦悩をなんとか自分の力で消したいと願う人たちのために生まれ、骨格だけを見れば、「自分で自分を変えることで、生きる苦しみを消す」という、とても端正な教えである。しかし、釈迦が説く「修行一筋の道」では救われない人たちもいることは確かである。不思議な力に身をまかせ、そこに抱かれることで安らぎを得たいと願う人々、それしか安らぎを得る道が残されていない人々、そういう人たちのために「般若心経」が作られたとも考えることができる。

### (3) 考察

般若心経は釈迦の論理的な説明をベースにし、釈迦のものの見え方さえも存在しないものだという一段階上の論理で説明する。佐々木のいうとおり、深い知性で世界を見、論理でものごとを突き止めることが難しい人には、情緒的に直観的にとらえ、お経（真言）をただ唱えれば救われるとしたこの教えは説得力がある。ただし、人材開発が自力で「救われる」（開発する）ことを目指すものと仮定すれば、このアプローチは採択できず、認識論の理解には直接活用できない。

## 4 一般意味論と認識論

前稿では、クリスティーナ・ホールのNLP（神経言語プログラミング）の視点に立った認識論を考察した。そのNLPが前提とした理論がコージプスキの「一般意味論」である。ここでは、コージプスキの一般意味論の3つの原理、「構造図」、その後継者の一人であるハヤカワの「抽象のはしご」について横尾（1984）から引用して考察する。これらは「データ」と「情報」との関係や、「情報」がさらに変換されていく過程を理解することに役立つ。

### (1) コージプスキの一般意味論の原理<sup>24)</sup>

#### (a) 第1の原理

コージプスキは事物に対する言語の関係を、現地に対する地図の関係にみたてこの比喩を好んで使った。そして「地図はそれが表わす現地ではない」(The map is not the territory it represents.)、同様に「ことばはものではない」(The word is not the thing.)と繰り返して説くことによって両者のちがいを強調した。この二つは混同されるべきではないと言った。これを「非同一性の原理」(principle of non-identity)という。これが第一の原理である。コージプスキは「現地≠地図」という明解な公式を使って言語と事物のちがいを人々に類推させ認知させようとしたのである。ところが、人はことばがものであるかのように

振舞っている。思考や行動が言語に引きづられ色づけられている。

(b) 第2の原理

第二の原理は次の二つの命題から成っている。「地図は現地の全てを表さない」(The map does not represent all of the territory.)。「ことばはものの全てを表わさない」(The word does not represent all of the thing.)。これは第一原理と表裏を成し、どんなに多くのことばを費やしてもものすべてを言いつくすことはできない。ことばの裏には見落され、切り捨てられた何かがあるということの意味している。これを「非全体性の原理」(principle of non-allness) という。現地のすべてを地図に盛り込むことができないのと同様に言語表現にも何らかの選択が行われている。言語の有限性をわかまえている人は相手のことばをうのみにしたり、それが事実の全てであるというような思いこみをしない。「信号反応」(signal reaction) いわゆる条件反射に対して間をおいた反応を「遅延的反応」(delayed reaction) という。

ことばともを短絡させることを「同一視反応」(identification reaction) というが、これは一般意味論の中心概念の一つとなっている。

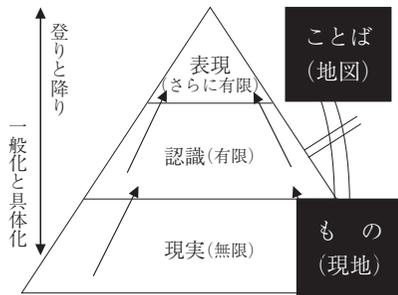
(c) 第3の原理

第三の原理は「自己再帰性の原理」(principle of self-reflexiveness) といわれるものである。「地図は自己再帰的である」(The map is self-reflexive)。理想的な地図はその中に縮小された地図を包含している。その地図はその中にその地図のさらに縮小された地図を包含している。この自己縮小の過程は理論的には無限に続く。その過程で細部が次第に欠落していき、小さな点となりやがては消えてなくなる。これと同じように言語も自己反射的な性質をもっている。言語は事物を表わすだけでなく言語自体について語ることができる。何度でも自分にはね帰る性質を持ち続ける。つまり、「ことば1」をもとにして「ことば2」、「ことば2」をもとにして「ことば3」という具合にはてしなく自己再生産していくことができる。外界の事物や経験を対象化し指示する言語（「ことば1」）を対象言語 (object language) といい、それを言いかえる言語（「ことば2」）をメタ言語 (meta-language) という。メタ言語による言いかえはさらに高い階層のことばによる言いかえと無限に続くが、この過程で必然的に起こる現象が抽象化 (abstraction) である。抽象度が高くなればなるほど情報は増大していくが、その反対象言語の特質が失われていく。したがって、メタ言語が事物を表わすかのように単純に考えてはならないのである。

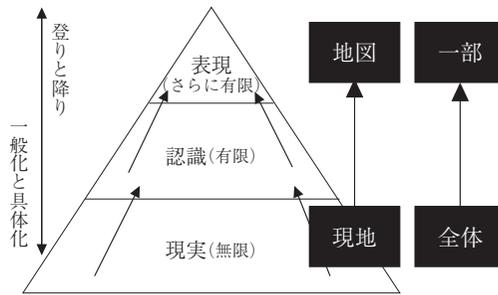
(d) 3つの原理に関する考察

コージプスキーの3つの原理を薄井の図にあてはめて加筆すると以下のように図示できる(図表19, 20, 21参照)。薄井の図は、コージプスキーの第1の原理, 第2の原理の考え方を説明できる図といえる。また薄井の図をさらに4階層目(メタ言語), 5階層目(メタ言語)……と多重階層にしていけば, 第3の原理も説明できる。

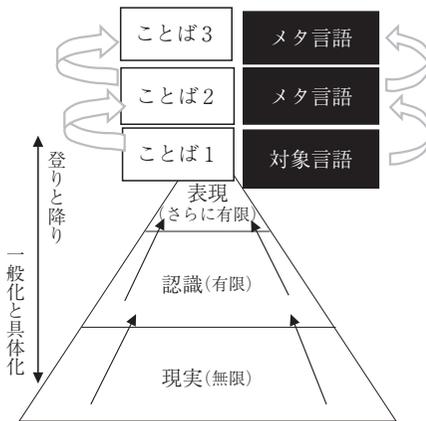
図表19 第1(非同源性)の原理



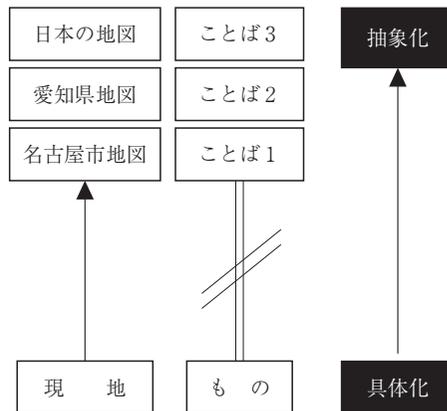
図表20 第2(非全体性)の原理



図表21 第3(自己再帰性の原理)



EX.

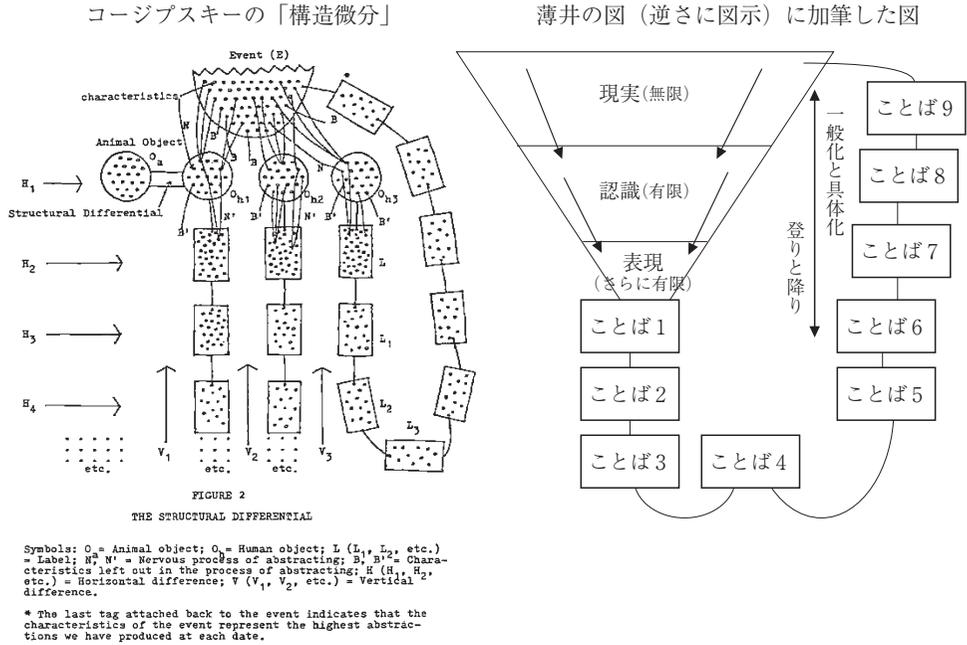


(2) コージプスキーの構造図<sup>25)</sup>とその考察

(a) コージプスキーの構造図

以上の三つの言語的特性, とくに第3の特性をわかり易く説明するためにコージプスキーは「構造微分」(Structural Differential)と呼ばれる構造図を考案した。これは、現象世界をことばに取り組み際の記号過程を描いたものである(図22左図)。なお, その構造図の隣に, 構造微分の考え方を薄井の図に取り入れて筆者(加藤)が加筆した図も掲載する

図表22 コージプスキの「構造微分」<sup>26)</sup> (左の図)と、薄井の修正図 (右の図)



(図22右図)。

コージプスキの図 (左の図) を簡単に説明してみる。図の一番上の放物線によって描かれた半球状のものは純粹に客観的な世界を表わしている。電子や原子などの物理・化学的素性が渦巻く「出来事」(event)の世界である。上部の波線はこの活発な運動が無限の広がりをもつことを意味している。半円の中の小さな丸は出来事のもつ無数の特徴を表わしている。この過程は直接肉眼では捉えられない「ものそのもの」の世界である。その下にある大きな丸が人間の直接認識の対象になるものであって、この丸は有限の大きさをもつ物的対象 (human object)を表わしている。人間の神経系の第一次抽象の結果Eの段階の多くの特徴が捨てられ(紐が宙に浮かんだままになっている)、有限個の特徴(紐によって上下が結ばれている)だけが拾い上げられる。この段階が人間にとって外在的世界となるところのものである。動物もまたこの次元に住んでいるが、言語を操ったり抽象作用を営むことができないので、動物的世界は人間的世界の左側に示されている。

この外在的世界に対して内在的世界とは言語的世界のことである。L (=Language) と表示された段階から下はすべて言語的段階である。第二次、第三次と順次抽象化が進むにつれて推論が加わりより高次の抽象概念が導入される。そしてそれがふたたび循環的に「出来事」に結びついていく。

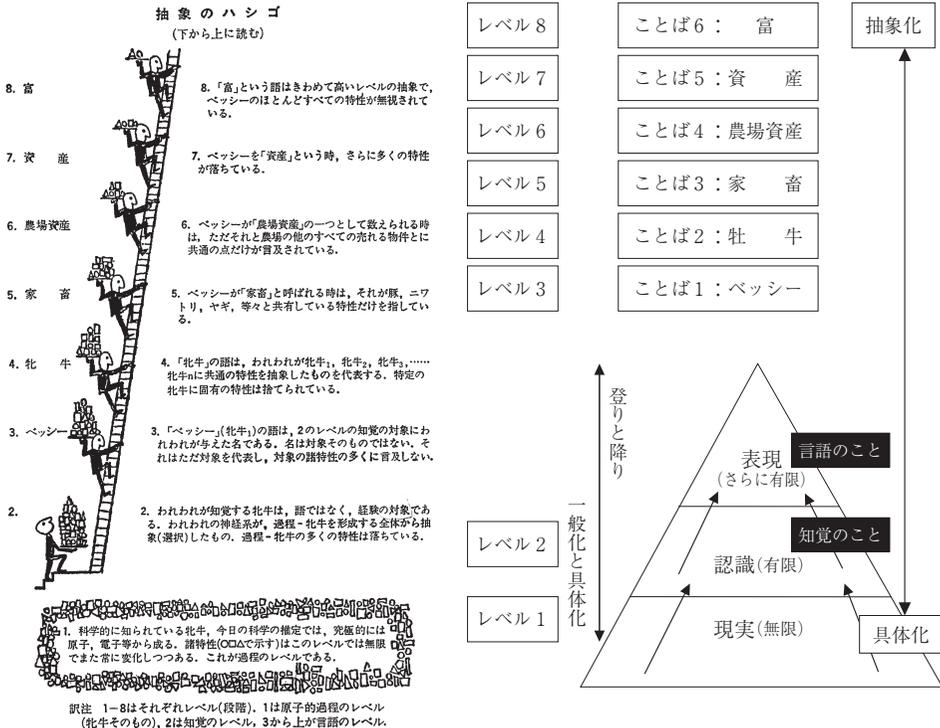
(b) コージプスキーの構造図に関する考察

コージプスキーの構造図のうち、「出来事」の世界は薄井のモデルでいう「現実」と考えることができる。「人間の神経系の第一次抽象の結果Eの段階の多くの特徴が捨てられ（紐が宙に浮かんだままになっている）」と説明するものは、(クリスティーナ・ホールがいう)「削除」,「有限個の特徴(紐によって上下が結ばれている)だけが拾い上げられる」と説明するものは、「認識」ととらえることができる。さらに、「第二次、第三次と順次抽象化が進むにつれて推論が加わりより高次の抽象概念が導入される」と説明するものは、養老がいう「脳が入力された情報を脳の中で回して動かしている」ものにとらえることができる。そして、高次の抽象概念が「ふたたび循環的に『出来事』に結びついていく」というのはこれまでのどの説明にもなかったもので新たな視点が加わったものだと考える。

(3) ハヤカワの「抽象のはしご」<sup>27)</sup>

この仕組をさらに見易く図案化し、実際にことばを使って例証しているのがハヤカワの「抽象のはしご」(abstraction ladder)である(図表23左図参照)。その隣(右図)には、その考え方を薄井のモデルに取り入れた(筆者(加藤)が加筆した)図も掲載している。

図表23 「抽象のはしご」(abstraction ladder)<sup>28)</sup>と薄井モデルの修正図



ハヤカワの図のレベル1は過程のレベルで現代の科学だけが入りこめる世界である。レベル2が対象の世界でここに一頭の動物が登場する。レベル3の言語的レベルにおいてこの動物にはじめて「ベッシー」という名前がつけられる。次のレベルにおいて推論が加わりベッシー、キャッシー、スージーなどと共に「牝牛」という類にまとめられる。そのように「ベッシー」を起点として階段は下から上に向かって登っているが次の「家畜」という一般的なカテゴリーになると家で飼育されている馬やにわとりとの類似性は言及されるものの牝牛としての個別性は影が薄くなる。「農場資産」とそれとからめた「富」というさらに包括的なカテゴリーになると現実存在としてのベッシーから遠くへだたり、個物としてのベッシーの特徴はことごとく色あせ消えうせてしまう。すなわち、下位概念から上位概念に進むにつれて抽象の度合いが増し、それにひきかえ、ことばの指示機能は低下する。

#### (4) ハヤカワの「抽象のはしご」に関する考察

コージープスキーは、一般意味論の第1の原理で、言語（情報）と事物（データ）の違いを強調する。第2の原理では、言葉の裏には見落とされ、切り捨てられた何かがあり、言葉はもののすべてを表さないといい。第3の原理では、言語は事物を表すだけでなく、言語自体について語ることができると説明する。これらの原則は、NLPの基本前提に影響を与えた。薄井のモデルに関連させて考察すると、第1の原理は、「データ（現実）」と「情報（表現）」は違うということ、第2の原理は、「情報（表現）」は「データ（現実）」を全て表していないということ、第3の原理は、「情報（表現）」を表現する「情報（表現）」が成り立ち、言い換えが続くと、どんどん抽象化していくことを表している。養老がプラトンの「アイデア」と呼んだ概念（頭の中だけで生み出すもの）の説明の理解にもつながる。

また、コージープスキーは現象世界を言葉に取り組む際の記号過程を「構造微分」と呼ぶ構造図で示した。前稿や本稿で考察してきたモデルとはまた違う図で、現象世界のうち一部（の特徴）が人間の認識の対象とされること（削除されること）が分かりやすく示されている。コージープスキーは、こうした言葉になる以前の「外在的世界」に対して、言語的世界のことを「内在的世界」と呼び区分する。その内在的世界は、第二次、第三次と順次抽象化が進むにつれて推論が加わり高次の抽象概念が導入されるとも説明する。さらに、それらが再び循環的に「出来事」に結びついていくという説明は人材開発に有用だと考える。

また、ハヤカワは、「抽象のはしご」という図で、現象世界が認識され、言葉が下位概念から上位概念へと順次抽象化が進むにつれて推論が加わり高次の抽象概念が導入されていくというプロセスを明示している。「釈迦の仏教」の例を使えば、認識、思考、執着、

怒りといった要素が「心」という概念に抽象化され、さらにそれは「私」というより抽象化された概念に変化し、抽象化が進むという説明もできる。また、養老がいう「プラトンのアイデア」の概念の理解にも役立つ。

#### IV おわりに

本稿では、前稿に続いて認識論を学際的にレビューし考察してきた。最初に、前稿で紹介した4つのモデルの図（筆者が一部加筆修正）を再掲して、類似点と相違点を考察した。4つのモデルとも「データ→情報」のプロセスを内包しており、特に薄井と地橋のモデルは「データ→認識→情報」というプロセスでとらえられる。この「データ→認識→情報」（実際には、薄井は、「現実→認識→表現」と説明している）というプロセスで説明する薄井のモデルと、「データ→認識→情報」の「認識」のプロセスをさらに詳細に説明しようとする地橋のモデルとに大別することができる。続いて、この薄井と地橋の2種類のモデルをベースに養老孟司『バカの壁』、釈迦の仏教、般若心経、一般意味論の認識論の考察を進めてきた。

まず、養老孟司の『バカの壁』を薄井のモデルにあてはめながらレビューした。現象世界（「データ」）が認識され、それが表現（「情報」）に変わる過程を、養老は「入力—出力モデル」で説明する。この入力段階で、養老は「バカの壁」が存在するという。また、脳内の働きを、「 $y=ax$ 」（ $y$ =反応、 $a$ =現実の重み、 $x$ =入力情報）という一次方程式で説明している。この「バカの壁」、「現実の重み」（の段階）で、クリスティーナ・ホールが言う削除、歪曲、一般化が行われているものと考えることができる。

なお、養老は自身の著作は仏教思想に近いというが、その仏教思想のうち「釈迦の仏教」と「般若心経」、それぞれの認識論も考察した。「釈迦の仏教」では、人の苦しみを消すにはものの見方を変えるしかないといい、「ものの見方」すなわち認識の仕方の重要性を説く。また、釈迦はこの世には、五蘊、十二処と十八界しかないと説明する。この「釈迦の仏教」の世界観を地橋のモデルに関連させて図示した。釈迦の仏教は、存在しているもの（データ）は何か、人間が作り上げたもの（情報）が何かを説明しており、「データ」と「情報」や認識論の理解にも有用である。また、「般若心経」は五蘊、十二処と十八界さえも存在しないという釈迦よりも一段上の論理展開をしている。「釈迦の仏教」が、緻密な論理体系をとっているのに対して、「般若心経」は情緒的、直観的な説明となっている。

続いて、NLPにも大きな影響を与えた「一般意味論」について考察してきた。具体的には、コージープスキーの一般意味論の3つの原理と構造図、その後継者の1人であるハヤカワの「抽象のはしご」を考察した。現象世界が認識され、言葉に変換され、その言葉

も言い換えられ下位概念から上位概念に進むにつれて抽象の度合いが増し、逆に、言葉の指示機能が低下していくことを確認した。「データ（現実）」と「情報（表現）」が違うこと、「情報（表現，ことば）」が「データ（現実）」の一部しか表していないこと、「情報（表現，ことば）」を表現する「情報（表現，ことば）」もあることなどが説明されていた。これらは「釈迦の仏教」の世界観や養老が説明していたプラトンの「イデア」の概念の理解にも役立つ。このように認識に関する複数の理論を学際的にレビューしておくことで、それぞれの理論の理解にも役立つという示唆が得られた。今後は、さらに異なる分野の認識論のレビューを進めることで、認識論の理解を深めることに尽力していきたい。

## 注

- 1) 梅本勝博（2006）51頁。
- 2) クリスティーナ・ホール（2007）169頁を参考に筆者が作成した。
- 3) 薄井担子（1996）26頁の図を一部筆者が修正した。
- 4) 地橋秀雄（2006）の説明をもとに筆者が作成した。
- 5) 養老（2003）4，14-16，30-31頁。
- 6) 養老（2003）30-38頁。
- 7) 養老（2003）79-80頁。
- 8) 養老（2003）53-55，63，164-165，167-170頁。
- 9) 養老（2003）74-75，81頁。
- 10) 図表10と図表12は、養老（2003）の記述をもとに筆者（加藤）が作成した。
- 11) 養老（2003）94，116，119-120頁。
- 12) 「五十代になって、本気で日本語を使って本を書くようになったら、仏教思想になってしまった。「本を書いた後に、中村元さんによる原始仏教についての短い解説を読んで驚きました。そこには私が書こうとしていたことがすでに書かれていたのです。」「私は近代の問題を扱っていたつもりでしたが、なんのことはない、お経を書いていただけだった。」（養老孟司（2004）
- 13) 佐々木（2012）24-25頁。
- 14) 佐々木（2012）26-27頁。なお、釈迦は『ダンマパダ』の中で次のようにいう（佐々木（2012）36頁）。「恐れなくてもよいことに恐れを感じ、恐れなくてはならないことに恐れを感じない。そういう者たちは、誤った見解を抱いたまま、悪い場所へと生まれ変わっていく。（317）」
- 15) 佐々木（2012）36-40頁。
- 16) 佐々木（2014）45頁。
- 17) 佐々木（2014）15，47，49頁。
- 18) 佐々木（2014）50-51頁。図表15.16.17は、佐々木（2014）をもとに筆者（加藤）が作成した。
- 19) 地橋のモデルに筆者（加藤）が加筆修正した。
- 20) 佐々木（2012）54-56頁。

- 21) 佐々木 (2014) 13頁。
- 22) 佐々木 (2014) 14, 42, 51頁。
- 23) 佐々木 (2014) 58, 81-82頁。
- 24) (a)(b)(c)については、横尾信男 (1984) 45-47頁を引用した。
- 25) (a)については、横尾信男 (1984) 47-48頁を引用した。
- 26) 横尾信男 (1984) 47頁, Korzybski, Alfred, (1933) 396頁。
- 27) 横尾信男 (1984) 48-49頁を引用した。
- 28) S. I. ハヤカワ (1985) 173頁。

#### 参 考 文 献

- Christina Hall (2007) 『The Art Of Training』 VOICE WORKSHOP INC. (邦訳：クリスティーナ・ホール (2007) 『芸術としてのトレーニング 成功→卓越→更なる質の向上へ (セミナーテキスト)』 VOICE)
- Hayakawa, S. I., (1978) Language in Thought and Action, New York: Harcourt Brace Jovanovich, Inc., 4th edition, 1978. (邦訳：S. I. ハヤカワ (1985) 『思考と行動における言語』 株式会社岩波書店)
- Korzybski, Alfred, (1994) 『Science and Sanity An Introduction to Non-Aristotelian Systems and General Semantics』 Institute of General Semantics, 5th edition, 1994.
- 薄井担子 (1996) 『改訂版 看護学原論講義』 現代社
- 梅本勝博 (2006) 「学者が斬る ナレッジマネジメントの起源と本質」『週刊エコノミスト』 第84巻 第41号, 毎日新聞出版
- クリスティーナ・ホール (2008) 『言葉を変えると, 人生が変わる NLP の言葉の使い方』 VOICE
- 佐々木閑 (2012) 『100分 de 名著 ブッダ 真理のことば』 NHK 出版
- 佐々木閑 (2014) 『100分 de 名著 般若心経』 NHK 出版
- 地橋秀雄 (2006) 『ブッダの瞑想法 ヴィパッサナー瞑想の理論と実践』 春秋社
- 養老孟司 (2003) 『バカの壁』 (株)新潮社
- 養老孟司 (2004) 「虫取り仏教談義」『文藝春秋』 2004年3月特別号, (株)文藝春秋
- 横尾信男 (1984) 「一般意味論の理論的基礎」『東京家政大学研究紀要』 第25集 41～53頁